

要旨

学習者の誤りに対しては、なんらかのフィードバックが行われる場合が多いが、本論では、1) この訂正フィードバックがなぜ必要だと考えられているかを論じ、次に、2) フィードバック効果を調べた先行研究は三つに分かれていることを示し、更に、3) このフィードバックを、誤りの存在に気づかせるフィードバックと実際に誤りを訂正するフィードバックに分け、例を挙げ、詳細に論じた。最後に、訂正フィードバックする際の注意点について言及した。

キーワード：誤り、フィードバック、効果、気づき、支援的な環境

1. はじめに

外国語を学習する際に、できれば誤りを犯さずに、その言語をものにしたいと思う人も多いと思われるが、現実には、外国語を学ぶ場合、誤りを全く犯さずにものにするのは不可能ではないだろうか。外国語習得の際に、間違いを犯さずに無理なく習得できる言語形式もあると思うが、学習者は習得過程で言語形式（ここでは構造、音、意味、アクセント、イントネーション、語用論的側面、社会文化的側面などを意味する）に関するなんらかの誤りを犯しながら、前に進み、目標言語の言語體系に近づいているのではないだろうか。

では、教室現場に目を向けて、教室で学習者が誤りを犯した場合、教師はどう対応しているであろうか。1) 教師がその時点で、または後日、訂正する、2) 学習者の自己訂正を待つ、3) 他の学習者からの他者訂正を待つ、又は、4) 教師が誤用に觸れない、というような選択が考えられる。ここでは、1) の教師による誤用フィードバックについて、その必要性とその効果と実際的なフィードバックの方法について考えてみたい。

語学教育上のフィードバックには、肯定フィードバックと否定フィードバックの二種類がある。肯定フィードバックとは、学習者が正しい発話を産出したり、少々誤りはあるが素晴らしい発話を産出したりした場合に、教師が学習者に与える称賛、激励などのコメントである。それに対し、否定フィードバックとは、学習者の産出した発話の一部になんらかの非文法的な、または、不適切な部分があるときに、正しい、または、適切な言語形式習得へと導く行為である。本論では、後者の否定フィードバックに焦点を当て、論を進めていく。また、否定フィードバックを分かりやすく、誤用フィードバックということばに以下では置き換えて用いる。

2. 誤用フィードバックがなぜ必要と考えられているか

学習者が誤りを犯した場合、それに対するなんらかのフィードバックが与えられる可能性が高いが、いったいどうしてそのようなフィードバックが必要だと思われるのであろうか。以下にいくつかその理由を挙げてみる。

1) 教師も学習者も誤用についてのフィードバックは有効だ（つまり、誤用が無くなる、減少する）と思っている場合が多い。

2) 教師も学習者も誤用についてのフィードバックは、学習者の言語習得を促進すると思っている。

3) 学習者は自分の発話の誤りに関してフィードバックを受けることにより、自分の発話に誤りが存在することに気付く可能性がある。

4) 教師が学習者の発話の誤りについて全くフィードバックをしないと、他の学習者もそれが正しいと思ってしまう危険性がある。

5) 学習者はフィードバックがないと、誤用なのに正しいと思ってしまう、それがいつまでも残り、不適切な言語形式で安定化、固定化、化石化する可能性がある。

6) 教師が学習者の発話の誤りについてフィードバックすることによって、誤りを犯した学習者の発話のどこが正しくて、どこが間違っているのかをその学習者並びに他の学習者に知らせることができる。

7) 学習者はフィードバックを受けることにより、正しい表現に觸れる。

8) 学習者の発話の誤りについてのフィードバックは、学習者に中間言語（目標言語を目指して、その時点までに構築してきた学習者言語の総體）と目標言語（学習している言語の総體）のギャップに気付かせる働きがある。

9) 教師が学習者の発話の誤りについてフィードバックすることによって、学習者は自分の発話を認知的にモニターする機会を與えられる。

10) コミュニケーション能力をある程度つけた中・上級レベルの学習者は、周囲の人から誤りに関する言及が少なくなるので、以前より誤用訂正を望んでいる場合が多い。

11) 学習者は、誤用についてのフィードバックを受けると、何か學んだような気がする。

12) 誤用についてのフィードバックは、教室の教師が一番しやすい。

13) 誤用についてのフィードバックは、多量のインプットを望めない教室環境にいる学習者にとっては貴重なインプット、情報源となる。

3. 誤用フィードバックの効果

坂本（1999）は誤用フィードバックの効果について様々な先行研究を整理しているが、大きく分けて、三つの異なる結果になっている。

1) 誤用訂正は言語習得に積極的な効果がある。

ここでは、効果があると主張する研究を概説する。作文における誤用訂正の効果を調べた White（1991）は、誤用フィードバックを受けた学習者と受けていない学習者を比較し、誤用フィードバックを受けた学習者のほうがより優れた運用能力を身につけ、その効果は誤用フィードバックを受けてから5週間後も衰えず、また、作文だけでなく話し言葉においても上達が見られたと報告している。また、Tomasello and Harron（1988, 1989）とWhite（1991）は、授業ではっきりと明示的に教えられた言語形式に関しては誤用フィードバックが有効であると述べている。Carroll, Swain, and Roberge（1992）、Carroll and Swain（1993）、そして Tomasello and Harron（1988, 1989）らは、誤りであることを指摘したり、目標とすべき正しい言語形式を提供するだけの暗示的(implicit)な誤用フィードバックは、明示的(explicit)にメタ言語情報を與える誤用フィードバックよりも効果が低いと報告しており、暗示的な誤用フィードバックと明示的な誤用フィードバックのどちらがより効果があるのかということに関しては未だ先行研究の結果が一致を見ない。Nagata（1993）は、コンピュータを利用し、複雑な言語形式の誤りに對して、明示的な誤用フィードバックを與えたグループと語句

の意味だけを與えたグループを比較した場合、明示的な誤用フィードバックを與えたグループの方が効果があったとし、また、Nagata and Swisher (1995) では、複雑な言語形式には暗示的な誤用訂正より明示的な説明の方が有効であるが、簡単な項目の場合は、どちらもあまり差がないという調査結果を報告している。更に、Nagata (1997) は、大學の日本語コースの2年生に助詞の練習を行い、誤りに對して明示的な誤用フィードバックを與えたグループと英譯だけの誤用フィードバックを與えたグループを筆記試験と口頭試験を通して比較した結果、明示的な誤用フィードバックを與えたグループの方が得点が高かったと報告している。Chen (1996) は、英語話者の中國語(初級)の助數詞の習得に關する研究を行い、[メタ言語による誤用フィードバック]グループと[recastによる誤用フィードバック]グループと"not correct"と示すだけの[明示的否定]グループと[誤用フィードバック無し]のグループ、の四つのグループに分け、比較した結果、1) 直後の筆記試験と口頭試験においては、[メタ言語による誤用フィードバック]グループと[recastによる誤用フィードバック]グループの方が、[誤用フィードバック無し]グループと[明示的否定]グループより効果があったこと、2) 6週間後の口頭試験の結果では、四つのグループに差がないこと、また、3) 6週間後の筆記試験においては、[メタ言語による]グループの方が、[誤用フィードバック無し]グループと[明示的否定]グループより効果があったこと、を報告している。

これらの以上をまとめると、誤用フィードバックが明示的であるか、暗示的であるかに關わらず、誤用フィードバックは効果があるという研究報告が多い。

2) 誤用訂正は制限はあるものの、効果はある。

White (1991) は、肯定證據(positive evidence、目標言語で正しい形式、文はどのようなものを學習者に與えること)と否定證據(negative evidence、目標言語ではそういう形式、文は可能ではないと知らせる)の兩方を受けたグループと、肯定證據のみを受けたグループを比べたところ、1週間後と5週間後のテストにおいては、兩方を受けたグループの方が、肯定證據のみを受けたグループよりもよくできており、短期効果は認められたが、1年後のテストでは兩グループ間の差が消えていた。また、Frantzen (1995) は、毎日文法復習と作文の誤用添削を受けたグループと、作文を書いただけのグループとを比較したところ、項目テストでは前者の方が後者よりよくできていたが、作文そのものにおいては、どちらのグループも正確さが増したと報告している。これから、文法教育と誤用訂正が言語項目に關する知識は増やすことができるけれども、総合的な使用能力、運用能力に關してはあまり大きな影響は與えないのかもしれないことを示している。同様の報告はDekeyser (1993) においても見られる。

3) 誤用訂正は効果はない。

Semke (1984) は、誤用フィードバックは作文の正確さの増加にも流暢さの上達にも効果がなく、教師からの内容に關するコメントの方が學習者の態度に影響を與えていると報告している。また、Carroll, Swain, and Roberge (1992) は、英語を母語とする中、上級のフランス語學習者に接尾辭 '-age'、'-ment' の規則を教えたが、誤用フィードバック有りのグループも誤用フィードバック無しのグループも差がなかったと報告している。また、Roig-Torres (1993) も英語を母語とする30名の初級スペイン語學習者を二つに分け、誤用フィードバック有りのグループと誤用フィードバック無しのグループに、會話テストと項目テストを行ったが、結果的に差はなかったと報告している。これらは、誤用フィードバックの効果は期待できないとする研究である。

以上の先行研究を整理すると、誤用フィードバックを與えるといつも効果があると思えるの

は早急であることが分かるが、少なくとも誤用フィードバックを與えない場合と比べると、與える場合のほうが効果があるか、または、その両者に差がないかのどちらかで、誤用フィードバックを與えない場合のほうが誤用フィードバックを與える場合より、よいという結果は未だ一つも報告されていないことがわかる。よって、結果的に効果が出ない可能性もあるが、誤用フィードバックを與えてみる価値はあると言えよう。

4. 日本語教育における誤用フィードバック

ここでは学習者の誤りに對するフィードバックの様々な方法について例を挙げる。誤用フィードバックは、学習者の發話の誤りを訂正するだけでなく、学習者に自分の發話の一部が誤りだと氣付かせる場合も含む。まず、誤りに氣付かせる方法について例を挙げ、續いて、誤りを訂正する方法について述べる。

(1) 誤りに氣付かせる方法

a) 明確化要求

学習者の發話に誤りがあったり、教師が發話の意味がわからないときに、聞き返すことによって、学習者に自分の誤りに氣付かせる方法。

教師：昨日は、どこで晩御飯を食べましたか。

學習者：昨日は友達の家を食べました。

教師：えっ？どこで？

學習者：友達の家で。

b) メタ言語學的キュー

學習者が知っている文法用語、規則などを使って、誤りに氣付かせる方法。

教師：昨日は、どこで晩御飯を食べましたか。

學習者：昨日は友達の家を食べました。

教師：助詞「に」は動詞「います」「あります」などの状態を表わす動詞と一緒に使いますよ。

學習者：じゃ、昨日は友達の家で食べました。

c) 誘い出し、誘出

間違いの部分に焦點をおき、誤りに氣付かせ、學習者にその部分を出させる方法。

教師：昨日は、どこで晩御飯を食べましたか。

學習者：昨日は友達の家を食べました。

教師：友達の家…？

學習者：友達の家で。

d) 繰り返し

全發話、または、誤りを含む發話部分を、上昇イントネーションで繰り返し、誤りに氣付かせる方法。

教師：昨日は、どこで晩御飯を食べましたか。

學習者：昨日は友達の家を食べました。

教師：友達の家ニ？ [+上昇イントネーション]

學習者：昨日は友達の家で食べました。

e) 強調

誤りの部分だけ強調して（時には、繰り返し）言い、誤りに気付かせる方法。

教師：昨日は、どこで晩御飯を食べましたか。

學習者：昨日は友達の家を食べました。

教師：友達の家ニ？（家ニ？） [+上昇イントネーション]

學習者：あっ、昨日は友達の家で食べました。

f) 誤り部分の指摘

誤りの部分が正しくないことを知らせ、誤りに気付かせる方法。

教師：昨日は、どこで晩御飯を食べましたか。

學習者：昨日は友達の家を食べました。

教師：「に」ではありませんが。

學習者：昨日は友達の家で食べました。

(2) 誤りを訂正する方法

a) 明示的訂正

はっきりと誤りを指摘し、正用を提示する方法。

教師：昨日は、どこで晩御飯を食べましたか。

學習者：昨日は友達の家を食べました。

教師：「家に」ではありません。「家で」です。

b) メタ言語學的訂正

はっきりと誤りを指摘し、學習者が知っている文法用語、規則などを使って、その説明を加える方法。

教師：昨日は、どこで晩御飯を食べましたか。

學習者：昨日は友達の家を食べました。

教師：助詞「に」は動詞「います」「あります」などと一緒に使いますね。でも、動詞は「食べます」ですから、一緒に使う助詞は「で」ですね。

c) 非明示的なりキャスト (Recast)

コミュニケーションの流れを妨げないように、學習者の發話の誤りを訂正し、學習者に返し、會話を続ける方法。

教師：昨日は、どこで晩御飯を食べましたか。

學習者：昨日は友達の家を食べました。

教師：そうですか。昨日は友達の家で食べたんですか。

それで、友達の家で何を食べたんですか。

學習者：友達の家でステーキを食べました。

d) 訂正部分の提示

学習者に訂正部分だけを教える方法。

教師：昨日は、どこで晩御飯を食べましたか。

学習者：昨日は友達の家を食べました。

教師：デ、デです。

学習者：昨日は友達の家で食べました。

教室でのフィードバックは、教師が学習者の発話、発音を聞いて、その場で直接直すという方法が多いと思うが、それに加えて、録音テープの活用なども大いに勧めたい。その理由は、授業中ではなく、時間を空けて後日学習者が自分の発話、発音を聞き、実際にどういう発話をしているのか、どういう音が出ているのかを録音テープを用いて、聞くことができ、また、自分の発話、発音と教師の発話、発音の違いに気づきやすくなるからである。教師のモデル発話との違いに学習者自身が気づかなければ、いくら練習してもあまり上達しないであろう。まず、“違いに気づく”ということがもっとも重要だと思われる。

また、単にフィードバックをするだけでなく、学習者に誤りの理由を説明させてみると、学習者がその時点で頭の中にどういう規則を作りつつあるのかが理解でき、教師にとっては次にフィードバックする際に大いに参考になるであろう。

5. 誤用フィードバックする際の注意点

以上、具体的にどのように誤用フィードバックを行ったらよいかを述べてきたが、誤用フィードバックをする際に注意したい点について、以下言及する。

1) 学習者と教師の信頼関係作り

人間誰も自分の誤りを教室でみんなの前で指摘されることは好まないであろう。しかし、教師と学習者の間に強い信頼関係が築かれていれば、その指摘も受け入れやすいのではないだろうか。教師も学習者一人ひとりのスムーズな言語習得を願っての指摘、フィードバックであり、それらは学習者を赤面させるためのものではないことを学習者も認識し、両者の信頼感を高め、よりよい関係を構築しておくことが大事である。

2) 温かい支援的な教室環境作り

信頼関係が築かれている場合は、非常に温かい、支援的な雰囲気のある教室になる。お互いがお互いの成長を望み、守られているという意識を持つことは、協調的な言語学習にとってなくてはならない要素である。このような教室環境においては、誤用フィードバックも肯定的に受け入れられるであろう。

3) 誤用は言語学习上、起きて当然で、悪者ではないという意識

現場の語学教師は誤用がなるべく出ないように、また、学習者のほうも避けられるものなら誤りを避けて通りたいと思っているかもしれないが、それは誤用を、出してはいけないもの、よくないものと悪者扱いしているからであろう。中間言語研究が進むにつれて、学習者の誤りは言語発達上の学習者には当然発生するもので、自然な現象であること、また、言語発達には誤りは不可欠なもので、誤りの発生は言語発達上健全な現象であることがわかってきた。もう誤りは、悪者ではなく、恥ずかしがる必要もないのである。それを教師は学習者にしっかり説明することが必要である。

4) 誤用は学習教材の一つという意識

誤りを犯すということは、別の視点から言えば、そこが学習者にとってこれからしっかり學ばなければならない學習項目であり、それを誤りが学習者に気づかせてくれているということである。よって、誤りはそれ自身が學習項目になり、學習のターゲットになる。誤りは、學習者にどんどん學習すべき教材を與えてくれているのである。

5) 學習者の性格を考えたフィードバック

誤用フィードバックはどんな學習者に對しても使えるかという点、一概にそうとも言えない。學習者一人ひとりの性格を知り、その時の學習者の心理状態や體調などを教師は瞬時に判断し、誤りに気付かせる方法でフィードバックを行うか、誤りを訂正する方法でフィードバックを行うか、決定しなければならない。教室で誤りが出た時に、學習者によっては、フィードバックをせずに、後日一般的な誤りとして學習者に提示するとか、オフィスアワーを利用してフィードバックを行うとかの配慮が必要となろう。

6) 一人の誤用はクラス全員を代表しての誤用と考え、フィードバックは全體に向かつておこなう

授業中、學習者が口を動かしている場合は、コーラスで全員で教師のモデル發話を繰り返しているときか、個人で話している場合であるが、実際に誤りが發生するのは個人で發話している場合であろう。実際に誤りを犯すのは、そのときは一人の個人、一學習者であるが、それを學習者個人の誤りとせず、學習者全員を代表しての誤りと見なすことが大事である。よって、教師は誤りを犯した學習者を見て、フィードバックするのではなく、フィードバックするときにはクラス全體に向かつて話すようにすべきである。

7) フィードバックすべき誤用の選擇

學習者の發話に1個しか誤りがない場合は、そこに關するフィードバックを行えばよいが、誤りが複数個ある場合は、教師は、もしフィードバックすると決めたらどの誤りに關するフィードバックをするかを瞬時に決定しなければならない。教師は複数の誤りからどの誤りが重大であるか、つまり、誤りの重大度をその場で把握し、フィードバックする誤りを決めなければならない。これは実際は簡単なことではないが、聞き手が誤解する可能性があるか、學習者が否定的な評價を下される恐れがあるか、發話文全體に關わる構文的な誤りか、などを考慮して、選擇する必要があるだろう。

8) フィードバックする機會の選擇

學習者の誤りはどのような授業活動をしている場合にも起きる可能性があるが、どんな授業でも誤りが起きればその場で即座にフィードバックすべきだとは一概に言えない。原則として、コミュニケーション養成を目的とした授業活動では誤用フィードバックは行うべきではなからう。なぜかという点、會話やペアワーク、タスク、プロジェクトワークなどの活動では、コミュニケーションの流れを中斷する可能性があるからである。よって、誤用フィードバックは言語形式（これは、構造、音、意味、アクセント、イントネーション、語用論的側面、社會文化的側面などを含む）に焦點を置いた授業活動をしているときに行うほうがよからう。ただ、コミュニケーション養成を目的とした授業活動においても、コミュニケーションの流れを中斷せずに、非明示的に行うリキャスト（Recasts）による誤用フィードバックは大いに活用されるべきであると思われる。

6. 今後の課題

以上、誤用フィードバックの有効性、方法などについて詳しく言及してきたが、最後に誤用

フィードバック研究の課題を2、3挙げてみたい。

1) 学習者の好むフィードバックとは？

恐らく学習者によっては、好むフィードバック、好きなフィードバックがそれぞれ違うかもしれない。もっとも多くの学習者に受け入れられる、好まれるフィードバックとはどういうものであるか。逆に、少数の学習者にしか好まれないフィードバックはどのようなものであるか。学習者のそれまでに受けた外国語の学習経験から、学習者の社会文化的な側面から、好まれるフィードバック、好まれないフィードバックを調査する必要がある。教師が好むフィードバックの方法と学習者が好むフィードバックの方法が一致すれば非常に望ましいが、もし異なれば、教師のほうは認識を新たにし、学習者が好むフィードバックの方法を身につけるべきであろう。

2) 誤用フィードバックの種類とその効果の研究

誤用フィードバックの方法を詳細に論じてきたが、これらの方法がどのような言語形式に対してもいつも有効であるとは限らないし、結果的にまったく効果がないという可能性も否定できない。これからの研究で調査しなければならないことは、どのような誤用フィードバックが、もし有効であれば、目標言語のどのような言語形式に有効であるのかを実証的に検証することである。やみくもに誤用フィードバックをしていても、実際は効率が悪からう。

3) 学習者の日本語能力レベルとフィードバックの変化

本稿では学習者の日本語の熟達度レベルはほとんど問題にしなかったが、恐らく入門レベル、初級レベル、中級レベル、上級レベル、そして、超級レベルでは誤用フィードバックの仕方にも異なる可能性がある。熟達度レベルに応じた誤用フィードバックとはどのようなものか、熟達度レベルに関わりなく共通して有効な誤用フィードバックが存在するのか、という点もこれからの大きな、かつ、言語教育上極めて重要な課題であろう。日本語教育者にとって重要な教授技術の一つでもある、学習者の誤りに対するフィードバックの方法に関する実証的な研究が、今後も数多くなされ、日本語教育の世界に大きく貢献していくことを望むものである。

<先行研究>

坂本 正 (1999) 「誤用訂正と日本語教育 — 先行研究から — 」『アカデミア』文学・語学編、第66号、325-346、南山大学

Carroll, S., and M. Swain (1993) Explicit and implicit negative feedback:

An empirical study of the learning of linguistic generalizations.

Studies in Second Language Acquisition, 15, 357-386.

Carroll, S., M. Swain, and Y. Roberge (1992) The role of feedback in adult second language acquisition: error correction and morphological generalization,

Applied Linguistics, 13(2), 173-198.

Chen, H-J. H. (1996) A study of the effect of corrective feedback on foreign language learning: American students learning Chinese classifiers. Unpublished doctoral dissertation, University of Pennsylvania.

Dekeyser, R. (1993) The effect of error correction on L2 grammar knowledge and oral proficiency. *The Modern Language Journal*, 77, 501-514.

Frantzen, D. (1995) The effects of grammar supplementation on written accuracy in an intermediate Spanish content course. *The Modern Language Journal*, 66,

140-149.

- Nagata, N. (1993) Intelligent computer feedback for second language instruction, *The Modern Language Journal*, 77(3), 330-339.
- Nagata, N. (1997) The effectiveness of computer-assisted metalinguistic instruction: A case study in Japanese, *Foreign Language Annals*, 30(2), 187-200.
- Nagata, N. and M. Swisher. (1995) A study of consciousness-raising by computer: The effect of metalinguistic feedback on second language learning. *Foreign Language Annals*, 28, 337-347.
- Roig-Torres, T. (1993) Error correction in the natural approach classroom: A contrastive study. Unpublished doctoral dissertation, University of Pittsburgh.
- Tomasello, M. and C. Harron (1988) Down the garden path: Inducing and correcting overgeneralization errors in the foreign language classroom. *Applied Psycholinguistics*, 9, 237-246.
- Tomasello, M. and C. Harron (1989) Feedback for language transfer errors: The garden path technique. *Studies in Second Language Acquisition*, 11, 385-395.
- White, L. (1991) Adverb placement in second language acquisition : Some effects of positive and negative evidence in the classroom. *Second Language Research*, 7, 133-161.
- Semke, H. (1984) Effects on the red pen. *Foreign Language Annals*, 17, 195-202.

Corrective feedback and teaching Japanese as a non-native language

Tadashi Sakamoto

It is generally the case that some kind of feedback is given when a learner makes an error in speaking a non-native language. In this paper, I discuss 1) reasons why corrective feedback tends to be given, and find that 2) three different groups according to the feedback effectiveness are found among the researches carried out in the past, and talk about 3) two types of feedback -- feedback which lets the learner notice the existence of error and feedback which corrects the learner's error. Lastly, some cautions that should be considered in delivering corrective feedback are discussed briefly.

・坂本 正

住所：日本國 466-8673 愛知縣名古屋市昭和區山里町18

南山大學大學院外國語學研究科

電話：052-832-3111

E-Mail : tadsaka@nanzan-u.ac.jp